

高専1,2年における男女別習体育授業の有効性の検証 - 女子学生へのアンケート調査から -

| | |
|-----|---|
| 著者 | 小川 裕樹, 児玉 英樹, 内山 了治, 唐木田 礼菜 |
| 雑誌名 | 長野工業高等専門学校紀要 |
| 巻 | 54 |
| ページ | 2-5 |
| 発行年 | 2020-06-30 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1051/00001074/ |

高専 1,2 年における男女別習体育授業の有効性の検証 — 女子学生へのアンケート調査から —

小川裕樹*1・児玉英樹*2・内山了治*2・唐木田礼菜*3

Verification of Effectiveness of Physical Education Classes for male and female learn separately in the 1st and 2nd Years of KOSEN.
- From a questionnaire survey to female students

OGAWA Yuki and KODAMA Hideki and UCHIYAMA Ryoji and KARAKIDA Reina

キーワード：体育，男女別習，男女共習，高専

1. 目的

過去の高等学校学習指導要領を見てみると、1978年の改訂まで格技領域は『主に男子に指導する』、ダンス領域は『主に女子に指導する』という記述があるが、1989年の改訂以降は男女による履修の差に関する記述は見られない。2008年の改訂により中学校の武道及びダンス領域が必修になり、男女共習授業が多く为学校で実践されてきたが、中学校・高等学校においては、依然として男女別習型授業が行われていることが多いのが現状である(村上, 2008)。

直近では、2018年告示の高等学校学習指導要領において、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続することを目指し、性別や障害の有無によらない「共生」の視点を重視した指導内容の改善を図ることを方針として「男女共習の原則」が明記された。ここで述べられている男女共習とは、例えばバスケットボールのゲーム時には男女が入り混じってゲームを行うことを指している。

しかしながら、学習指導要領の効力が及ぶおおよその高等学校は男女共学であり、男女比はおおよそ1:1であることを想定していると思われる。対して長野工業高等専門学校(以下、本校)の1,2年生は各専門学科が入り混じる混合学級であり、男女比を見ると、おおよそ6:1となっている。このように極端に女子が少ないと、男子に比べて習熟度がゆっくりな女子に技術指導が偏りがちになり、大多数の男子への指導が短時間になる。

また、バスケットボール等のゴール型においては、女子のみでチームを組むことができず、チームに女子が1人という状況になり、ゴール下で待機しているだけという場面も多く、身に付けるべき動きであるスペースを活用するという姿が見られないばかりか運動量も少ない状況が見られる。よって、男女比の差が大きい中で男女共習を行うことは困難であると感じ、2018年度から本校1,2年生では女子体育の授業を設けて、男女別習を実施することとなった。

そこで、本研究では、男女別習の授業が女子学生に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

女子体育は、シラバスの内容は男子と同様であるが、技能習得の過程を簡単などころから段階的に進めたり、ゲームのルールを簡易的にしたり、実態に合わせて変更して実施している。

女子体育開講後に受講した1学年を対象に2019年2月(30名、以下2018年度)及び2020年2月(34名、以下2019年度)にアンケートを実施した。

調査項目は運動量、技能習得、体を動かす楽しさ、人間関係づくり、思考の5項目に関して中学時に受講した男女共習体育と男女別習体育との差に関して質問した。2018年度と2019年度の1年生から収集したこれら回答データに対して単純集計及びクロス集計を行った。クロス集計は、体育が好き・嫌い、得意・不得意の観点から実施した。

また、2018年度2年生(34名)は1年時に男女共習で受講しているため、本校における男女共習と男女別習の差に関しての比較を同様に実施した。

*1 一般科准教授 *2 一般科教授

*3 一般科非常勤講師

原稿受付 2020年5月20日

3. 結果

3-1 単純集計からの全体の傾向

回収したアンケートに対して単純集計を行った。運動量については約77%の学生が「増えた」「やや増えた」と回答した。理由を問う自由記述では、「ゲームに積極的に参加するようになった」「失敗を恐れないようになった」というものが多く見られた。

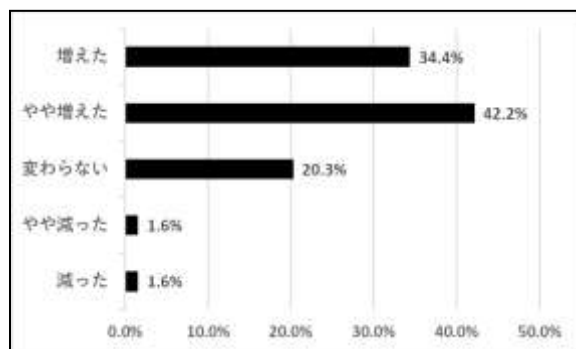


図1 運動量の変化 (全体)

技能向上に関わる設問については約51%の学生が「向上した」「やや向上した」と回答した。自由記述には、「男子ばかりでボールを支配しないので触球機会が増えた」「失敗を恐れず積極的にできる」というものが多く見られた。一方で、約28%の学生が「向上しない」「あまり向上しない」と回答している。理由としては、「男子の見本がない」「教えてくれる人がいない」というものが多く見られた。

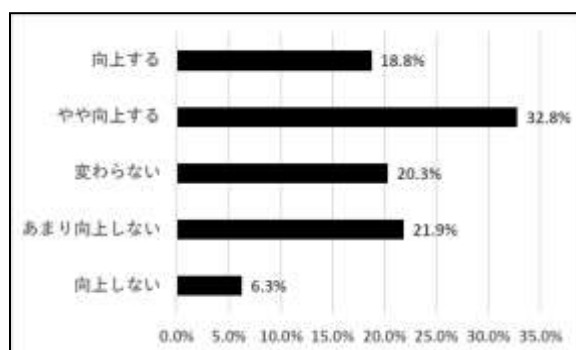


図2 技能向上の変化 (全体)

楽しさの比較については約74%の学生が「増えた」「やや増えた」と回答した。自由記述には、「上達するから」「コミュニケーションの機会が増えたから」というものが多く見られた。

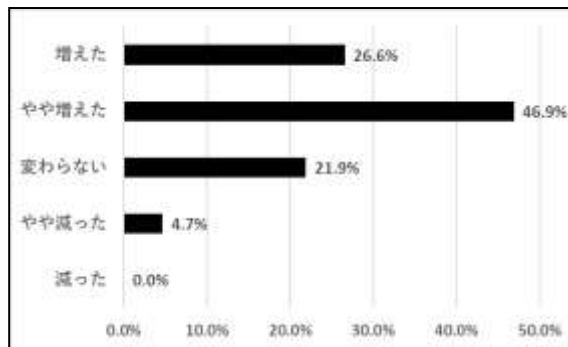


図3 楽しさの変化 (全体)

かかわりに関する設問では、約62%の学生が「増えた」「やや増えた」と回答した。自由記述からは、「女子同士の方が話しやすい」というものが多く見られた。一方で、「女子とのかかわりは増えたが男子とかわることができない」という記述も見られた。

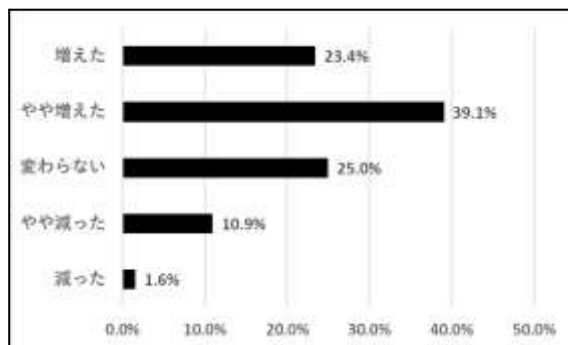


図4 かかわりの変化 (全体)

思考面に関する設問では約36%の学生が「変わらない」と答えた。自由記述からは「以前から考えていなかった」という理由が多く見られた。また、「やや減った」という学生が約23%いた。「高度な話し合いにならない」「女子同士だとついふざけてしまう」という記述が見られた。

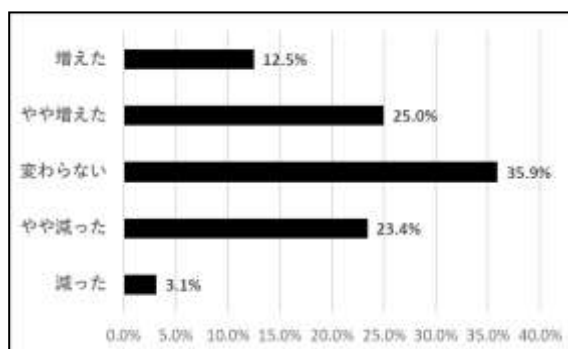


図5 思考機会の変化 (全体)

男女別習の継続を希望するかという設問については半数が「どちらでもいい」と答えた。自由記述からは「それぞれに良さがある」という理由が多く見られた。男女別習を希望する学生は約 44%であった。理由としては、「楽しいから」「女子同士で関わる機会がこれしかない」というものが多く見られた。

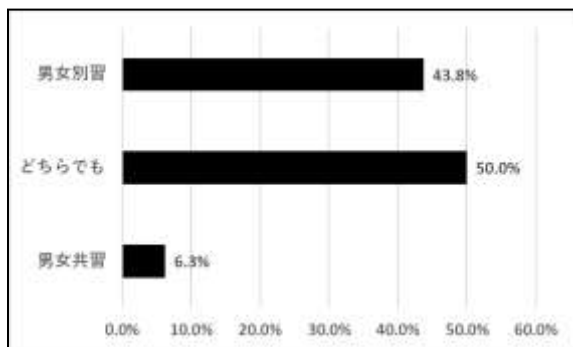


図 6 男女別習の継続希望（全体）

3-2 クロス集計より

(1) 体育を「好き」と感じる学生と「嫌い」と感じる学生との比較

約 73%の学生が体育を「好き」と回答し、約 27%の学生が体育を「嫌い」と回答した。ここでは、体育を好きと感じているか、嫌いと感じているかでクロス集計を行った結果を示す。

運動量については大きな差は見られなかったが、約 6%の学生が運動量は「減った」と回答した。

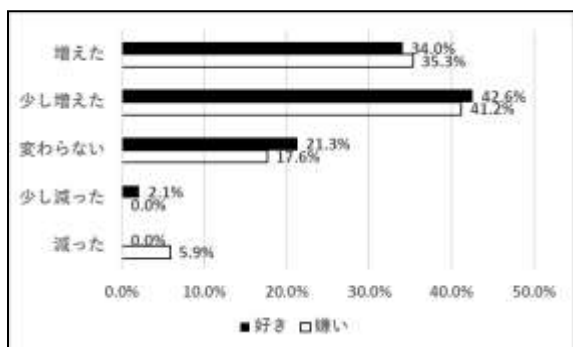


図 7 運動量の変化（好き・嫌いによるクロス集計）

技能向上に関する設問については、「向上した」「やや向上した」と回答した学生は「好き」と感じている学生が約 50%に対して「嫌い」と答えている学生では約 59%であった。

また、「嫌い」と答えた学生のうち約 12%が「向上しない」と回答した。

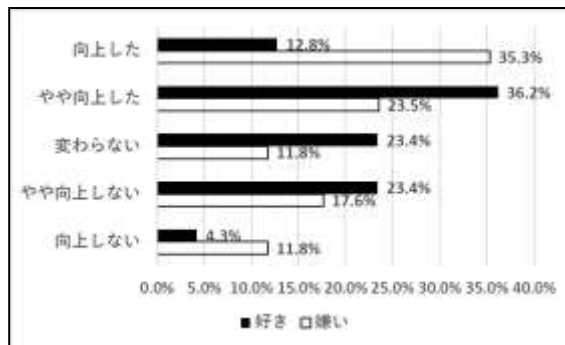


図 8 技能の向上（好き・嫌いによるクロス集計）

楽しさの変化に関する設問については、両群に大きな差は見られなかった。

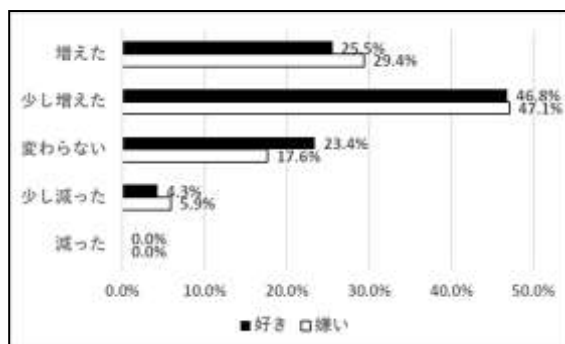


図 9 楽しさの変化（好き・嫌いによるクロス集計）

友とのかかわりに関する設問については、「嫌い」と答えた学生の約 6%が「減った」と回答したが、全体的な傾向はほぼ同じであった。

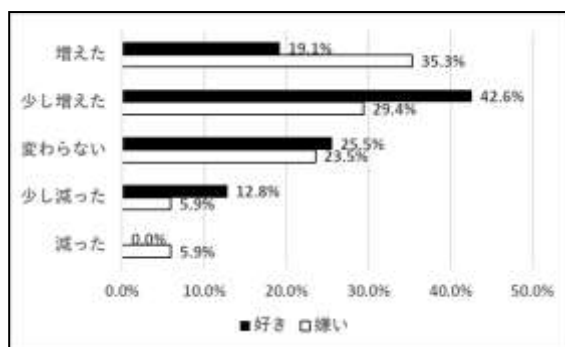


図 10 かかわりの変化（好き・嫌いによるクロス集計）

思考に関する設問については、「嫌い」と答えた学生の約 41%が「少し減った」「減った」と答えており、「好き」と答えた学生の回答を大きく上回った。

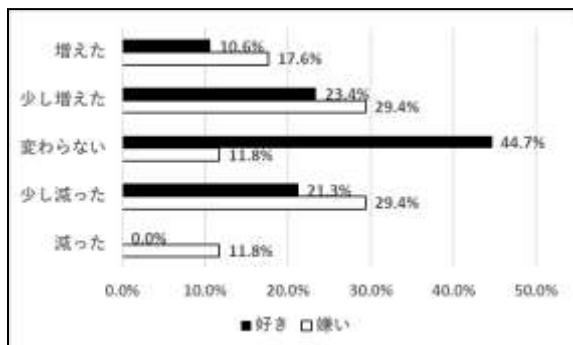


図 11 思考機会の変化(好き・嫌いによるクロス集計)

男女別習の継続希望に関する設問では、「好き」と感じている学生では約 38%、「嫌い」と答えた学生の約 59%が男女別習を希望していた。また、「好き」と感じている学生の約 2%、「嫌い」と答えた学生の約 18%が男女共習を希望していた。

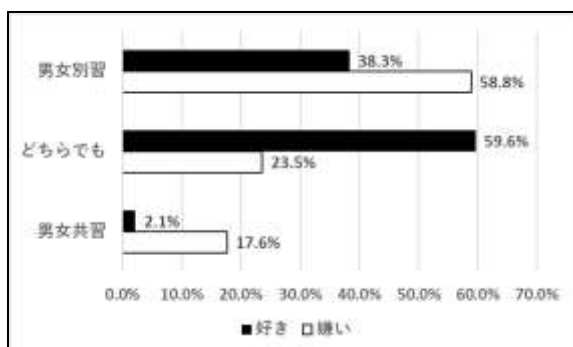


図 12 男女別習の継続希望(好き・嫌いによるクロス集計)

(2) 体育を「得意」と感じる学生と「苦手」と感じる学生との比較

それぞれの設問に対して体育を「得意」と感じる学生と「苦手」と感じる学生にはどのような差が見られるのかを検証するためにクロス集計を行った。「得意」と感じている学生は全体の 25%、「苦手」と感じている学生は全体の 75%であった。

運動量については、二つの群がおよそ同等の結果となった。運動が「得意」と感じる学生には、運動量が減ったと感じる学生はいなかった。

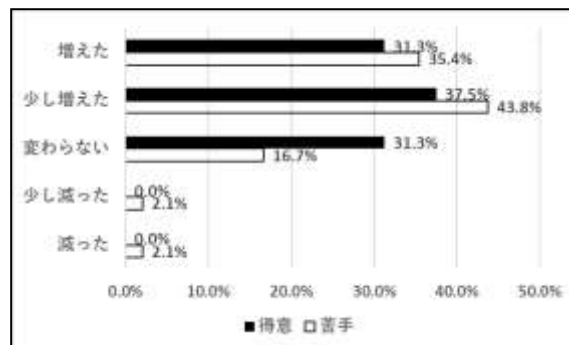


図 13 運動量の変化(得意・苦手によるクロス集計)

技能の向上に関する設問では、「得意」と感じる学生の約 37%が「やや向上しなかった」「向上しなかった」と回答したのに対し、「苦手」と感じる学生では約 25%であった。

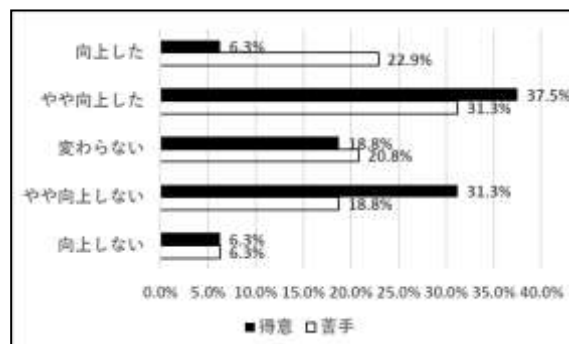


図 14 技能の変化(得意・苦手によるクロス集計)

楽しさに関する設問においては、「得意」と感じている学生の約 12%が「少し減った」と回答したのに対して「苦手」と感じる学生では約 2%であった。

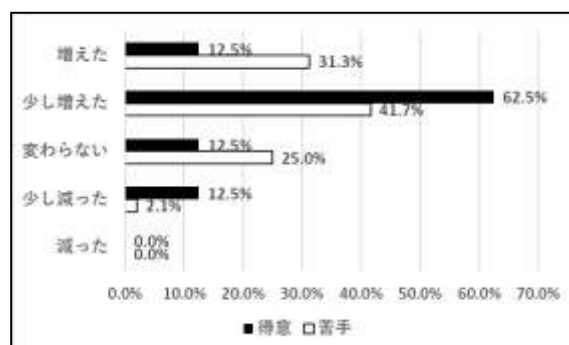


図 15 楽しさの変化(得意・苦手によるクロス集計)

他者とのかわりに関する設問においては、「増えた」、「やや増えた」に差が見られるものの、ほぼ同様の傾向が見られた。

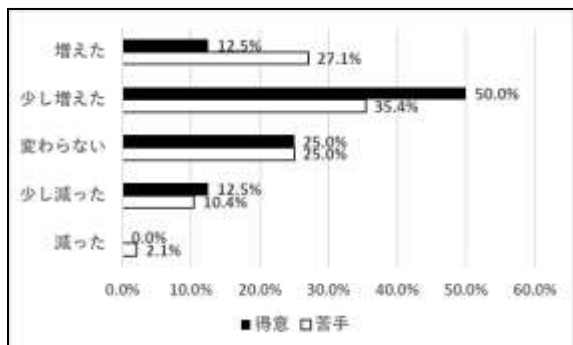


図 16 かかわりの変化 (得意・苦手によるクロス集計)

思考に関する設問においては、「得意」と感じる学生の約 25%が「増えた」「やや増えた」と回答しているのに対し、「苦手」と感じる学生では約 42%が回答した。

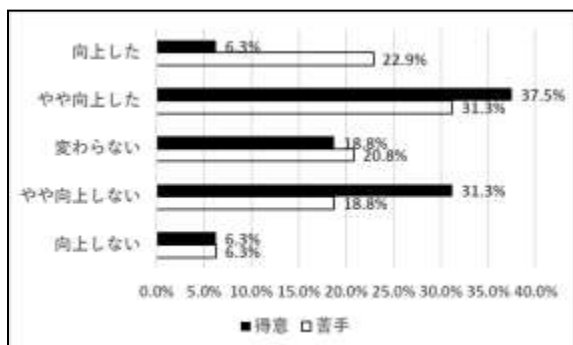


図 17 思考機会の変化 (得意・苦手によるクロス集計)

男女別習の継続に関する設問については、「得意」と感じる学生の約 31%が男女別習を希望しているのに対し、「苦手」とする学生では約 48%が男女別習を希望すると回答した。

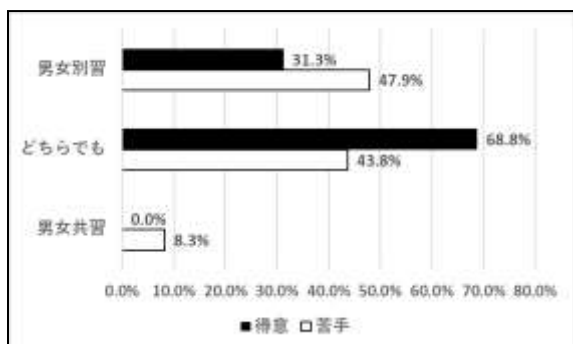


図 18 男女別習の継続希望 (得意・苦手によるクロス集計)

3-3 1年時の男女共習と2年時の男女別習の比

較

2018年度2年生に実施した1年時の男女共習と2年時の男女別習の差についてのアンケートを単純集計で分析した。

触球機会、運動量に関する設問では約 64%が「増えた」「やや増えた」と回答した。理由は、3-1と同様に「ゲームに積極的に参加するようになった」、「失敗を恐れなくなった」というものが多く見られた。

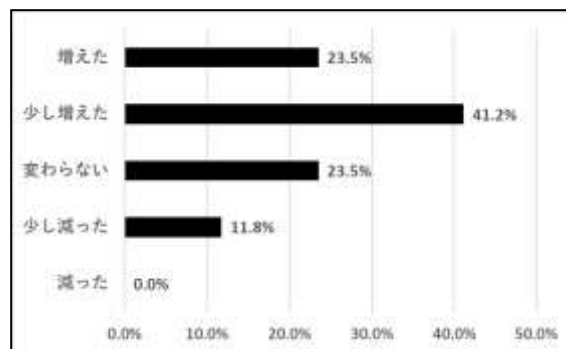


図 19 運動量の変化 (2018年度2年全体)

技能向上に関する設問については約 58%が「向上する」「やや向上する」と回答した。記述を見ると「運動量が増えた」「自分から動くようになった」というもの多く見られた。対して約 29%の学生が「向上しない」「やや向上しない」と回答した。記述を見ると「うまい人の見本がない」「教えてくれる人がいない」というもの多く見られた。

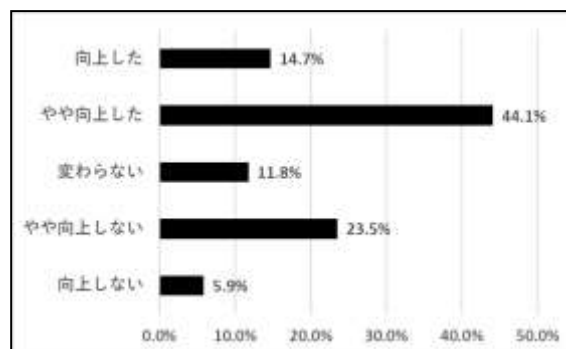


図 20 技能向上の変化 (2018年度2年全体)

楽しさに関する設問については約 64%が「増えた」「やや増えた」と回答した。記述を見ると「運動の機会が増えた」というもの多く見られた。対して約 20%の学生が「減った」「やや減った」と回答した。記述を見ると「スピーディーな試合ではなくなった」というもの多く見られた。

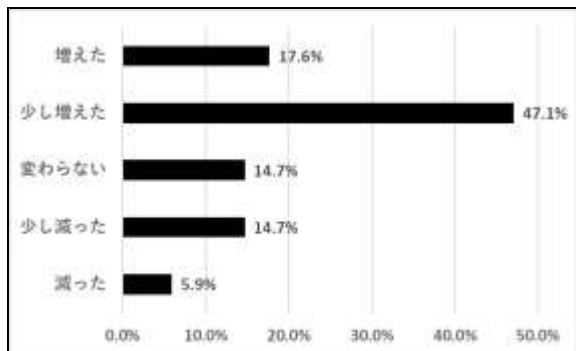


図 21 楽しさの変化 (2018 年度 2 年全体)

友とのかかわりに関する設問では約 88%が「増えた」「やや増えた」と回答した。記述を見ると「女子だけの方が話しやすい」というものが多く見られた。

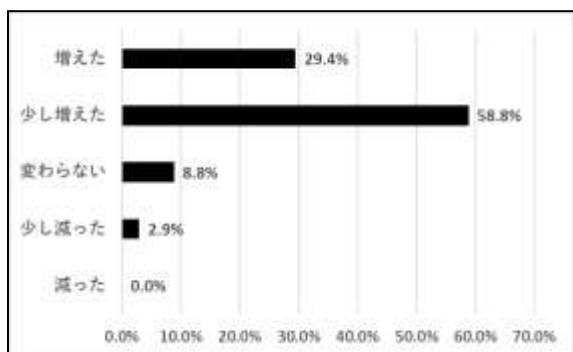


図 22 かかわりの変化 (2018 年度 2 年全体)

思考に関する設問では約 61%が「増えた」「やや増えた」と回答した。記述を見ると「今までは男子が考えていたが自分で考えないといけなくなった」というものが多く見られた。

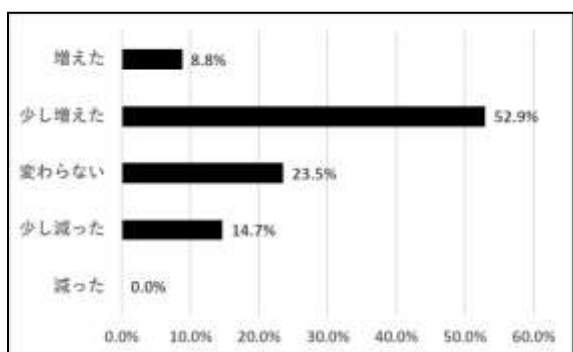


図 23 思考機会の変化 (2018 年度 2 年全体)

4. まとめ

全体的に男女別習の方が学習効果が高い傾向が見られた。特に、運動機会の増加や他者とのかかわりの項目では高い学習効果が確認できた。技能向上についてはそれほど大きな変化がなく、多くの学生が理由として挙げていた「良い見本がいなくなった」という面については、男女共習の場合は自然と男子が良い見本になっていたことを考えると、男女別習では教師サイドからの師範として、より多くの師範機会を設けないといけなかったことがわかった。「教えてくれる人がいなくなった」という理由に対しても同様であり、教師からのより丁寧な働きかけが重要である。しかしながら常に一人ひとり丁寧に技術指導を行うことは難しい面もあるのでグルーピングをグループ内異質集団として行うことで、運動を得意とする学生が苦手とする学生に教える雰囲気を用意的に創り出していくことが必要である。

学習指導要領改訂によって、より強く男女が関わりながら授業を進めることが求められているが、女子の割合が低い中では学習効率が高いことが明らかになった。

また、5年制の本校において男女別習は1, 2年のみであり、より生涯スポーツに近い3~5年では男女共習で行うため、将来男女関係なくかかわりながらスポーツを行っていく態度を養うことは十分できる。むしろ1, 2年で技術や力いっぱい動く態度を身に付けられるこの流れは本校の実態に即しており、学生を育てる上で最適な流れなのではないだろうか。一方で教員と女子学生とのコミュニケーションの機会が少なかったり、学生が主体的に学習を進める教授技術が身につけづらかったりするため、担当が非常勤講師であることは課題として感じる。

今後は男女別習を経験した女子学生が4, 5年になってどのような変化があったか、また、男子学生に女子と共習になってどうかを調査していきたい。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省：「高等学校学習指導要領」(1978)
- 2) 文部科学省：「高等学校学習指導要領」(1989)
- 3) 文部科学省：「高等学校学習指導要領」(2008)
- 5) 文部科学省：「高等学校学習指導要領」(2018)
- 4) 村上周一：中学校における体育授業の在り方に関する研究—男女別習・共習に注目して—, 早稲田大学スポーツ科学研究科修士学位論文。(2008)